-2020年度教育職員特別研修報告書-

・法学部教授　　小林　真紀
(ルクセンブルク大学)　1【報告書】

・経済学部教授　葛谷　登
(愛知大学語学教育研究室)　2【報告書】

・経営学部准教授　古川　千歳　※10月頃掲載予定
(名古屋大学大学院経済学研究科)　3【報告書】

・現代中国学部准教授　木島　史雄
(愛知大学人文社会学研究所、東京大学大学院人文社会系研究科)　4【報告書】

・国際コミュニケーション学部教授　塚本　倫久
(愛知大学語学教育研究室)　5【報告書】

様式第４（特別研修）

教 育 職 員 特 別 研 修 実 績 報 告 書

研　　修　　者	小林　真紀	
所 属 ・ 職 名	法学部　教授	
研　修　期　間	2020年 4月 1日～ 2021年 3月 5日（339日間）	
研 修 の 種 類 ※ 該当に○をつける。 （複数可）	１．自宅特別研修（自宅から研究機関に通う研修） ２．国内特別研修（移住して研究機関に通う研修） 3．海外特別研修（海外の研究機関において研究する研修）	
研　修　課　題	終末期医療関連法における患者の権利保障―ルクセンブルク、ベルギー、フランスの比較	
研修内容の概要	新型コロナウィルス感染拡大の影響で、2020年3月中旬より、ルクセンブルクでは本格的なロックダウンとなり、原則として外出は禁止され、ルクセンブルク大学も完全に立ち入り禁止となった。6月より、ロックダウンは徐々に緩和されたが、大学側が海外からの客員研究員の受け入れをすべてストップしたため、客員研究員としての実質的な活動はできず、ルクセンブルクの自宅で研究をおこなう形態を続けざるをえなかった。９月より、大学は再開されたが、多くの授業はオンラインでの開講となり聴講がかなわず、ルクセンブルク国立図書館にて資料収集をおこなうことで、できる限り最新の情報を入手できるように努めた。12月より、ルクセンブルクおよび周辺国で再び新型コロナウィルスの感染状況が悪化し、予定していたベルギーへの出張を断念した。また、ルクセンブルク国立図書館も入館規制を強めたため自由な閲覧が難しくなった。種々の制約の中、図書館の館外サービスや館員専用の情報検索システムの利用により、可能な限り情報を収集し論文をまとめることに努めた。	
研修成果の概要	ベルギーについては、患者のなかでも精神疾患あるいは認知症の患者を対象とした安楽死によって引き起こされている問題について検討した。こうした患者は、コミュニケーション上の問題や意思表示の困難さという問題を抱えており十分な保護が必要である。とくに、医療者が、すべての可能な治療が実施されているか、長期間の罹患歴を確認できるかなど、一層の慎重さを徹底することが重要になる。さらにこれを補完する目的で、医療機関の規模や配置できるスタッフ数に応じて、独自のガイドライン等による判断基準が明示されることが望ましい。これらの成果については、論文としてまとめ、愛知大学法経論集223号に掲載した。 ルクセンブルクに関しては、安楽死法制定時に浮上した2つの問題を手続的側面から検討し、とりわけ、①国務院による（代議院における）第2回投票免除の拒否の問題および②大公による安楽死法裁可拒否の問題について考察し、その結果を学外の研究会において発表した。 フランスに関しては、患者の権利保障の一環として、患者の意思の尊重という観点から、2002年のクシュネール法以降、3つの法律による事前指示書の法制化に着眼し、とくに「脆弱な人々」と呼ばれるカテゴリーに入る法的保護を必要とする人（被後見人、被保佐人など）への配慮の必要性について考察した。この研究の成果については、近日中に愛知大学法経論集に論文を投稿する予定である。	

様式第４（特別研修）

教 育 職 員 特 別 研 修 実 績 報 告 書

研　　修　　者	葛谷　登	
所 属 ・ 職 名	経済学部　教授	
研　修　期　間	2020年　4月　１日～　2021年　3月　31日（365　日間）	
研 修 の 種 類 ※ 該当に○をつける。 （複数可）	①．自宅特別研修（自宅から研究機関に通う研修） ２．国内特別研修（移住して研究機関に通う研修） ３．海外特別研修（海外の研究機関において研究する研修）	
研　修　課　題	明末中国におけるカトリック受容の思想史	
研修内容の概要	明末中国にカトリックが伝えられたとき中国の士大夫は奉教、容教、反教の三つの態度を取りました。葉向高は内閣大学士として位人臣を極めました。この葉向高が取った態度は容教でした。 葉向高は楊廷筠著『西学十誡初解』に序を書き贈りました。これを訳出し注を施すことを研修の眼目としました。大変短い文章ですが、思想史的には東西思想の邂逅を背景にしたもので作業は難しいものがありました。この序には内閣文庫本と『蒼霞餘草』の二種類あり、異同に留意しました。 また彼の著作集とも言うべき『蒼霞草全集』十六冊を読み、メモを取り序との関連について考えました。これは政治史についての知識も前提とするもので読み進めるのは大変でした。 またイエズス会宣教師アレニとの葉向高の実質的な宗教的議論の書である『三山論学記』を全訳し、序との関連について考えました。 更にアレニの中国人カトリック信徒との問答集とも言うべき『口鐸日抄』について僅かに部分的にではあるが、メモを取りました。 当初海外の研究機関（ドイツの Monumenta Serica 編集部）や文書館（台湾の故宮博物院図書館）等を訪問し関係する研究者から教示を受ける予定でしたが、かないませんでした。	
研修成果の概要	イエズス会士 Standaert 師の楊廷筠に関する専論の著書がこの序に二種類あることの意味を照射してくれました。 その叙述によれば『蒼霞餘草』所収のものが葉向高の真筆であり、内閣文庫本のものは明末イエズス会の宣教師或いはカトリック教会関係者が書き換えた可能性が高いというものでした。 葉向高はイエズス会宣教師との親交が深かったけれども、カトリックについての知識はどのようなものであったのでしょうか。 彼の著作集というべき『蒼霞草全集』の全部に目を通して、葉向高のカトリックに関する著作は他にアレニ『職方外紀』に書き贈った序以外にはない事実を改めて確認することが出来ました。『西学十誡初解』の彼の序の訳出作業はそうした直接的な言及の少なさを前提に進めました。 そこで『霞草全集』の文章中に序との関連のあるものを探しました。 またアレニとの実質的な宗教的対談集とも言うべき『三山論学記』の訳出作業を通して彼が正統的な朱子学者であり、基本的には儒教の枠内で問題を捉えようとする姿勢が貫かれていることを窺い知ることが出来ました。	

	更にアレニと中国人カトリック信徒の問答集の『口鐸日抄』の一部に目を通して明末中国におけるカトリックの受容を考えるうえで中国の伝統や文化との関連でどのようなことが重要であるのか、ということの輪郭を朧気ながら辿ることが出来ました。 こうした作業を通して葉向高等の中国の一般的知識人とアレニ等のカトリック宣教師との根本的差異は人間を気の集散に基づいて考えるのか、それとも個的生命の永続性に基づいて考えるのか、という人間観の差異にあることが浮き彫りにされました。 『西学十誡初解』の序の訳出を通してこうした広がりを得ることが出来ました。

様式第４（特別研修）

教育職員特別研修実績報告書

研　修　者	木島 史雄	
所属・職名	現代中国学部 准教授	
研修期間	2020年9月1日～ 2021年3月31日（212日間）	
研修の種類 ※ 該当に○をつける。 （複数可）	①. 自宅特別研修（自宅から研究機関に通う研修） ②. 国内特別研修（移住して研究機関に通う研修） 3. 海外特別研修（海外の研究機関において研究する研修）	
研修課題	美術鑑賞手法から見る美の様相（時間的・空間的偏差と論理）	
研修内容の概要	現今、東洋美術の魅力が理解されなくなっていることについて、本研修では、原因が東洋鑑賞手法の喪失であることを示すことを企図する。従来その鑑賞手法は口伝的に伝承され、明確に記述されていない。そこで西洋的東洋美術研究の手法・成果と対比することでそれを明確にする。具体的には、欧州所在東洋美術コレクションの形成ならびに欧州刊行の東洋美術書のデータ収集と分析をなし、それを東洋における鑑賞手法と比較する形で研究を遂行する。当初、西の手法については英国ケンブリッジ大学、東については東京大学で資料収集と研究・討議を行う予定であった。	
研修成果の概要	上記内容のような予定であったが、悪疫流行のため英国への渡航はかなわず、結局愛知大学人文社会学研究所で2か月、東京大学大学院人文社会系研究科で5か月の研修となった。なお研究委員会の指示で、8月末までは渡航の可能性を探りつつ、研修期間から除外し、通常勤務の形をとった。 欧州刊行東洋美術書については、幸いにも急速に書籍のディジタル公開が進み、ある程度のデータ収集は可能となったが、著作権の関係から近50年のものは入手できずに終わった。また欧州の東洋美術コレクションについては、訪問・実見ができなかったため、ほぼ調査未了となった。 いっぽう東洋における鑑賞手法の伝統については、愛知大学、東京大学収蔵資料を用いて、ある程度の捕捉を終了したが、その他の収蔵機関、図書館は外部者への公開が厳しく制約されており、十全の成果を上げるには至らなかった。考察対象は当初の構想の三分の一程度であるが、知見を「忘れられた語りの手法：中国画鑑賞論―「伏生授經」圖を手がかりに―」（200,894 字。今回添付提出）を一応完成させた。資料不足もあり「書法」および西洋美術史的東洋美術研究については論じることができなかった。構成と主旨はほぼ構想し終わっているので、資料の充足を以て近く「中国書画鑑賞論」ならびに「西洋美術史的東洋美術研究考察」を完成させたい。 なお愛知大学人文社会学研究所在籍中に豊橋図書館簡斎文庫で見出した貴重書『韓非子翼毳』の書誌的・学術史的考察を行い、「簡齋文庫本『韓非子翼毳』と太田方」を執筆して、こちらは「文学論叢」第154輯に掲載された（今回添付提出）。	

様式第４（特別研修）

教 育 職 員 特 別 研 修 実 績 報 告 書

研　　修　　者	塚本　倫久	
所 属 ・ 職 名	国際コミュニケーション学部　教授	
研　修　期　間	2020年　8　月　1　日～　2021　年　3　月　31　日（　243　日間）	
研 修 の 種 類 ※ 該当に○をつける。 （複数可）	①　自宅特別研修（自宅から研究機関に通う研修） ２．国内特別研修（移住して研究機関に通う研修） ３．海外特別研修（海外の研究機関において研究する研修）	
研　修　課　題	英語辞書学とコーパス	
研修内容の概要	英和辞典の編纂にコーパス（コンピュータに蓄積された大規模な自然言語データ）を利用することはすでに常識となり、従来の学習辞典の記述はいずれも高水準になっている。しかしながら、コロケーション、定型表現などを取り上げ、発信に特化した特殊辞典の分野では、なお新しい辞書編纂の余地が残されていると思われる。外国語の学習では基本語の習得が上達の鍵となる。基本語には通例複数の意味があり、そのような語は多義語と言われる。日本語と系統の異なる言語である英語の習得においては、文法のみならず語彙においても学習者は習得に困難を生じる。多義語の習得における日本人学習者の問題点を考察するとともに、効率的に受信、発信に結び付ける新たな学習辞典（仮称：日英多義語コロケーション辞典）の編纂に取り組む。 さらに、2012年に出版した『プログレッシブ英語コロケーション辞典』（小学館）の改訂作業を進める。	
研修成果の概要	当初英国バーミンガム大学で研修を行う予定であったが、新型コロナウィルス感染症のパンデミックのため自宅特別研修となり、コーパス言語学の研究者との交流はできなかったが、新たな辞書の編纂に向けて構想を練り、原稿を書き進めることができた。 語彙の知識は量と深さが重要だと言われている。基本語の習得段階では深さと幅の知識がより大切である。深さは believe という動詞がどのような型を取るか、believe that..., believe+0+ to be, believe+0 + to do のような語と語の結びつき、幅は collect,break などの基本単語がどのような多様な意味に拡張するかの多義の知識である。 語の意味は一般に一つではなく多義である。例えば sweet の意味は「甘い」に対応する。taste sweet は「甘い味がする」のようにコアの意味では日英が対応している。sweet は味覚の意味から sweet smell のような嗅覚、sweet voice のように聴覚の意味に転じ、さらに「美しい」sweet view、「心地よい」sweet dream のように英語の sweet は positive の意味に拡張していく。一方、日本語の「甘い」は味覚の意味では英語と一致しているが、「ネジが甘い」のように「ゆるい」のイメージでとらえられ、「考えが甘い」「認識が甘い」「点が甘い」のように negative な意味に拡張する。日本語の「甘い」が sweet に対応しない意味では、学習者は日常表現であっても英訳に困難を生じる。困難の原因の一つは比喩的な意味の拡張にある。日英の多義語を対照してみることにより、意味の違いを意識しながら学ぶことができる。日本語、英語のコーパスを利用することにより、日常使われる頻度の高い表現で、日本人学習者にとっ	

	て難しい表現を抽出することが可能となる。このような経緯から本研修では、コーパスを利用した「日英基本多義語のコロケーション辞典」の執筆を中心におこなった。 　さらに、『プログレッシブ英語コロケーション辞典(2012)の改訂作業を進め、2021年2月17日に第6刷3000部が発行され、修正点を反映させることができた。 　また、3年計画の学長裁量経費プロジェクト「英語による日本文化紹介のテキスト作成」は代表者として2020年度が完成年度であった。私がプロジェクトの代表者であったことから、7名で執筆したテキストの出版に向けた編集作業を年間を通して行った。テキスト *A Japanese Cultural Anthology：Nagoya & The Tokai Region* は2021年3月28日に出版された。